



「ピクニック」がつくり出す風景

「ピクニック」には、屋外に出て活動するという意味がある。誰もが自分なりのピクニックを作り出せる。

小さなピクニック空間が、様々な空間・人に影響を与え、新たな人の流れや活動を生み出し、人が集まる大井町の風景を形成していく。

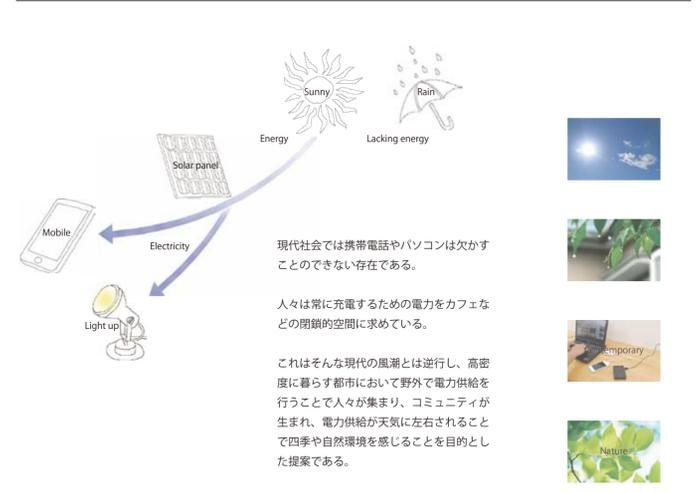
空間構成



新たな人の流れ

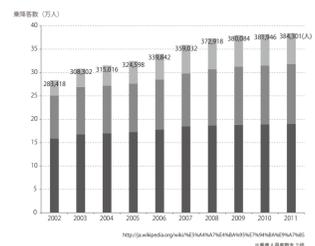


自然と共存する新しい充電空間



現状

大井町駅は三つの路線の中継地点として1日平均乗降者数は30万人に達する。



大井町駅の現状



しかし、多くの客層は駅前だけの行動に偏っており、滞留を促す空間がなく、まち全体の回遊性へと繋がっていないのが現状である。

大井町駅を利用する人



大井町に住む人



大井町で仕事する人

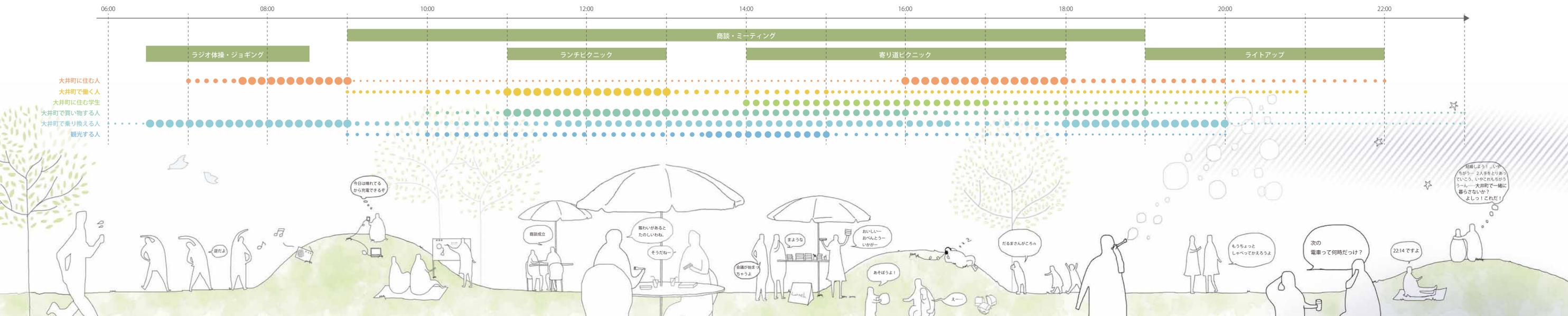


自分なりのピクニック



ピクニックというプログラムを使いまちへの滞留性を高め、まち全体への回遊性へと繋げるプランを提案する。

一日の中でうつりゆく風景



～人があつまる大井町駅前中央通りアイデアコンペ～

提案要旨説明書

■作品タイトル

「ピクニック」が作り出す風景

■提案要旨

大井町駅は、移動の中継地点として多くの人々に利用されており、2002年から2011年の間には乗降者数が10万人以上増加している。しかし、一方で、まちへの滞留性が低いことが問題となっており、単調な風景しか作り出せていない。

そこで私たちはピクニックによって作り出される風景を提案する。

「ピクニック」には、屋外に出て活動するという意味があり、いろいろな人たちが自分なりのピクニックを作り出せる。

また、目的地に向かうまでの間に寄り道することで人の滞留を促し、さらにはまち全体の回遊性へと繋げることができる。

提案プランの流れは

1. 駅前にピクニック空間をつくる。
2. 芝や花を手入れしながら、周囲の人とのコミュニティを広げる。

計画地にある緑地児童遊園を改装し、ピクニック空間とする。

この空間を時間の流れに合わせ、サラリーマン・住民・訪れた人などが自由にピクニックすることにより、

ひとつと自体が一日の中でうつりゆく風景となり賑わいが演出できる。

それが契機となり駅から町へと出ていくきっかけが生まれ回遊性が高まる。

仕掛けとして、ソーラーパネルを用いた天気によって左右されるコンセントを配置する。

スマホ等の充電ができる装置によって「ノマド」的な行動も生まれる。

しかし、天気によって左右され、雨の日には利用できない。

それは高密度に暮らす都市の中で四季や自然環境を感じる仕掛けとしても機能する。

小さいピクニック空間をつくることにより、様々な空間・人に影響を与え、新たな人の流れや活動が生まれ、人が集まる大井町を形成していく。

※なぜこのような提案としたのかという理由や、特に工夫した点、アピールしたい点などを自由に記載してください。